

景清の深層―琵琶法師と猿樂の間

松岡心平

夏目漱石の小説『行人』では、主人公一郎の父が二人の来客とともに「景清」を謡うシーンが詳しく描かれる。その謡を聞いていた二郎（一郎の弟）の所感、ほぼそのまま漱石のものでもあろう。

自分がかねてから此「景清」といふ謡に興味を持つてゐた。何だか勇ましいやうな惨ましいやうな一種の気分が、盲目の景清の強い言葉遣から、又遙々父を尋ねに日向迄やる娘の態度から、涙に化して自分の眼を輝かせた場合が一二度あつた。

どうして「何だか勇ましいやうな惨ましいやうな一種の気分」が、謡曲景清にあらわれるのかといえば、その根本要因は、シテの景清が平家方の猛将として華やかな戦歴の過去を持ちながらも、現実には盲目の琵琶法師として乞食におちぶれているという二重性を生きているところに求められるだろう。

「さすがにわれも平家なり」という、景清が娘に屋島での武勇談を語る前に発せられるセリフこそは、この景清の二重性を端的に物語る言葉であつた。従来は、「さすがに自分も平家方の武將なので」と解されていたこの文句について、「平家」とは『平家物語』を語る琵琶法師つまり「平家語り」のことだと看破したのは香西精氏であつたが『能謡新考』、このセリフには、景清

の人生の二つの局面が同時に塗り込められているのである。

景清のように「平家語り」ではないものの、同じような盲目、乞食の琵琶法師で、しかも天皇の皇子の身分から転落してきた人物として能に描かれるのが、蟬丸（延喜帝の四宮）である。

興味深いのは蟬丸、景清とともに琵琶法師たちの集団の祖先として祀られていることだ。近世に入って、光孝天皇の皇子（人康親王）に祖先伝承が変更される以前、中世の当道『平家物語』を語る琵琶法師の中心的な同業者組織が祀っていたのが、蟬丸であつた。近世になつても、蟬丸・景清を祖とする琵琶法師たちがいた。兵藤裕己氏の『平家物語の歴史と芸能』によれば、「蟬丸のばあいは、近世の筑後地方の盲僧を支配した高良大社周辺に、蟬丸の伝説・遺跡が散在しており、高良山配下の盲僧は都から筑後に流離した蟬丸の伝承を伝えていた。また、鹿児島の常楽院を本寺とする地神盲僧（常楽院流）は、近代まで『延喜さん』と称する蟬丸伝承を語っていた」のであり、一方の「景清のばあひ、出羽の羽黒山には景清を祖とする盲僧派があつたといわれ、また、景清を祭神とする宮崎の生目八幡社は、近世をつうじて日向地方における地神盲僧の拠点になつていた『太宰管内誌』日向之國」のである。

能「景清」において、景清が日向の国宮崎に流されて海岸辺の山陰の藁屋で暮らし、「日向の勾当」という名前を持つていっているという設定も、この地の中世からの地神盲僧の活動から来たものにちがいない。

兵藤氏は同書で当道の伝書『座頭昇進之記』を引いているが、そこには、当道以外に「地神派」という、山伏のように錫杖を持って祈禱する一派があつて、それは「至極の下り物」であり、また地神派には「景清派」「蟬丸派」の二派があり、この二派のものは官に進むことができないなどと書かれており、近世の当道は「景清派」「蟬丸派」の地神盲僧たちを排除・賤別していったと述べている。

じつは、このプロセスは、猿樂にも見られる。琵琶法師たちにとつての「地神」（地神経読みを通しての地霊鎮め）にあたるものは、猿樂では「翁」である。猿樂の歴史の中でも、翁グループは戦国期から文禄頃にかけて「年預」として座から切り離され（宮本圭造氏説。表章氏のように南北朝から翁グループと演能グループが分かれていたとする説は、宮本氏同様、私も採らない）、排除・賤別されたのである。

もつとも一部の平家物語研究者の中には、地神盲僧の平家座頭への先行を認めない人がいまだにいるようだが、私は、猿樂芸能との並行性という視点からも、兵藤氏が言う「地神盲僧がもともと平家座頭に先行するものであり、平家座頭は、むしろ地神盲僧から分化・派生した」（同書）とする説に賛成である。

ただし、当道の平家座頭たちが、自分たちのルーツである地神経読みを丸ごと排除したのに対し、猿樂は、翁芸を一部排除したにとどまり、

むしろこれを一貫して大事に扱ってきたところが大きく異なる点である。

琵琶法師と猿楽の何よりの近さの証拠は、両者に共通する宿神(シユク神)信仰である。

琵琶法師たちがあがめる宿神は、「守宮神」と書かれることも多いが、「十宮神」「守誓神」「主空神」などと表記は多様である。『当道要集』では、たとえば、

一、守(宮脱カ)神あかめうやまひ信すへし、
偽にもかろしむへからず、二季塔、無懈怠
可動事

などとあり、二季の塔(二月の積(石)塔会と六月の涼)という当道座の最重要年中行事が、表向きは、祖神である人康親王(雨夜尊)やその母に対してなされるのに対し、その背後の守護神としての「守宮神」祭祀の重要性が示唆されている。

猿楽の方の宿神信仰は、金春禅竹の『明宿集』の存在を挙げておけば十分だろう。『明宿集』はもともと、「翁」の解明が目ざされていて「明翁集」と名づけられていたが、翁イコール宿神なので、途中から「明宿集」にタイトルが変更されたのである。

猿楽の「翁」は宿神であり石神であり、また荒神であり、この荒神が堅牢地神に通じることからも、琵琶法師たちの堅牢地神鎮めの地神経読みに通じ、当然彼らが信奉する「守宮神」に通じるのである。

この日本の古層の大地の精霊に対してつけられた多様きわまる名称群については、すでに柳田国男氏が『石神問答』で明らかにしており、さらに服部幸雄氏が『宿神論』で追求し、最近では中沢新一氏が『精霊の王』で問題を鋭く新展開させている。

この大地の精霊を鎮めたり動かしたりできる二つの芸能集団が、どちらも雅びの文学世界に近づいて、一方は『平家物語』を語り、一方は能を演じていったことにより、中世の芸能は大展開を遂げたのであった。

しかし、二つの芸能集団の距離は近い。二つの集団の近さは、古くは、十一世紀初頭の法成寺修正会において、呪師とベアとなるべき散楽(猿楽)のかわりに琵琶法師が入っていることからもうかがえる(『小右記』治安三年(一一〇三)一月八日条、万寿四年(一一二七)一月九日条など)。

それよりも、十四世紀の大和の結崎で二つの集団がクロスした可能性を考えてみよう。

落合博志氏は、鎌倉時代末期の『大乘院具注曆日記』延慶二年(一一三〇)五月九日条の「盲目大進房自今夜始物語平家一部也」という記事に注目し、この日から『平家物語』を通して語り始めた盲目の大進房を、大乘院に所属する盲僧座の一員だろうと推定している(鎌倉末期における『平家物語』の享受資料の二、三について『軍記と語り物』二十七号、一九九一年三月)。

一方、この大進なる人物は、稲葉伸道氏が「中世寺院の権力構造」(一九九七年)で紹介している南都の検断資料『大乘院奉行引付』康永三年(一二三三)九月二十八日条に、「彼盲目中大進盲目張行也」と見える、盲目たちを率いる大進と同一人物だろう。大進を首謀とする盲目たちのデモ行動に対して六親罪科が決定し、大進が兄弟である、大乘院領宮合郷の増福法師のところに寄宿していた関係で、増福法師の住宅が検討されたのである。

そして『大乘院奉行引付』の貞和五年(一二三四)

の記事によれば、盲目座のトップ大進は、観阿弥が所属していた結崎座のある結崎を本拠としていたようなのである。稲葉氏は、同書でこう解説している。

貞和五年閏六月下旬の条には、寺辺・国中の盲目(盲目)が「確執」し、衆徒の僉議として「田舎盲目」の張本四人(御衣木路の三位・額田部の円阿弥・結崎の大進・南鶴の助)の住宅を検討した記事がある。盲目の集団が寺辺と大和国中にあり、それぞれの集団の長たる人物が盲目たちを統率したと思われる。同条によると、盲目は「一乗院被管」となっている。

これに続けて稲葉氏は、「衆徒は検断と同時に盲目が『地心経』(地神経)を用いることを禁止している」と述べ、この記事が盲目と地神経を結びつける初出資料とも評価している。

つまり、盲目の大進房は、『平家物語』を通して語ると同時に、「地神経」をも読む盲目の琵琶法師集団の頭目であり、その琵琶法師集団は大和の結崎にあったのである。

これは、猿楽座の形成を追求する脇田晴子氏が、「中世芸能座の構造と差別」(『周縁文化と身分制』二〇〇五年)で述べている、「奈良の『五ヶ所・十座』の支配を受ける結崎の声聞師の座が存在する。これは声聞師の集落であって、猿楽師に限らず、声聞道とか、七乞食・七道者といわれたあらゆる雑芸者を含む地縁的集落の共同体である」という記述と響きあっており興味深い。

能「景清」や「蟬丸」に見える琵琶法師に対して、猿楽の書き手が親近性をもって「惨まし」さまで表現しうる背景に、このような二つの集団の近さを考えてみたいのである。(東京大学教授)